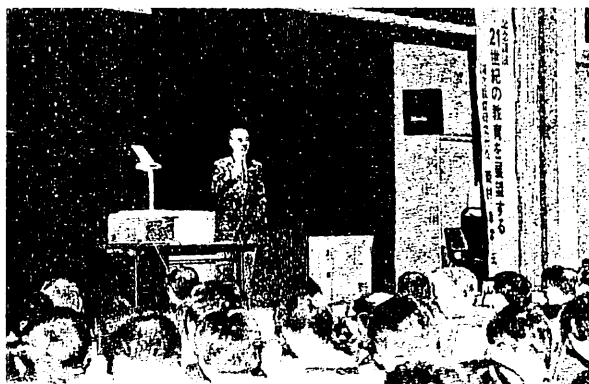


成功裡に終わる

第10回秋田県教育研究発表会



講演される国立教育研究所長 菱村 幸彦氏

寒波の続く今冬、くしくも穏やかな好天に恵まれた2月14・15日の両日は、全県から述べ1000人を超える参加者となりました。

今年度は、第10回目の節目を迎え、しかも、本センターの移転・開所の初年度でもあり、その日程にはいくつか新しい企画も組み込まれたので、内容をたどって振り返って見たいと思います。

開会式に先立って行われた、併催の教育奨励賞授賞式は、研究論文総数が28と例年より多い応募ということもあって、本県教育研究の層の厚さを感じながら個人1、団体4の授賞が行われました。

続いて、センター全体の研究課題「一人一人の思いをはぐくみ、豊かで特色ある学校の創造」について、四つの各研修部がそれぞれの視点から取り組んだ研究が発表されました。

- ① 新しい学校の創造を見つめた学校評価の在り方に加え、簡便な集計処理の具体例も示した教職研修部。
- ② 小・中・高の今後の授業に、“教材との出会い” “個と集団のかかわり” “学び方” “思考力・判断力・表現力の育成” の4つの視点から具体的にその在り方を示した教科研修部。
- ③ 「教育ネットAkita」の運用開始を背景とし、パソコン通信を利用した交流による情報活用能力の育成に一つの在り方を示した情報教育研修部。
- ④ 精神薄弱養護学校における、個への指導と集団における個への指導について、日々の授業の積み重ねから児童生徒の生き生きと活動する姿を追及した特殊教育・相談研修部。

これらは、センター全体の研究課題にそれぞれの研修部の特質から迫ったもので、総合教育センター

教科研修部長 桧 森 治 樹

の研究の新しい展開といえるものでした。

続く分野別の発表は、各学校の発表申し込みが殺到し、各市町村教育研究所の共同研究1、本教育センターの研修員の研究24と指導主事の研究5を加え、その数93にものぼる記録的な発表数となりました。

これは、各学校の教育研究の意欲と厚さを反映するもので、発表会場の増にもつながりました。参加者にとっては選択肢の拡大につながり、しかも、その移動は全館に広がりましたので、新しいセンター施設等の視察の機会にもなったように思います。

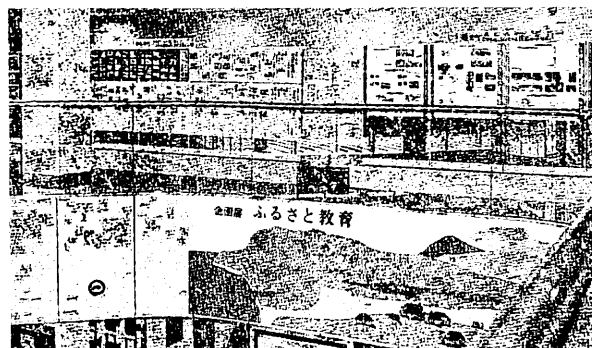
2階のラウンジには、県内9市町村のご協力を得ながら、「ふるさと教育」の実践状況が新しく展示され、中身の濃い成果に参観者が絶えませんでした。

フォーラムの企画も新しい試みでした。「ふるさと教育」と「パソコン通信」の二つのフォーラムが生まれ、各学校の営みの現状や成果、今後の在り方などについて、意見交換や情報交換がなされました。多数の参加者の真剣な発言が印象的でした。

日程の最後は、「21世紀の教育を展望する」と題する国立教育研究所長菱村幸彦氏の記念講演で締めくくられました。

幅広い職務経験と国際的な視野からの卓越した識見は、聞く者に教育の今日的な問題の所在やこれからの教育改革の本質的な部分を明らかにし、しかも教育のあるべき姿を洞察する新たな目を与えてくれるものでした。

全県各地の参加者で一杯の両日は、研究継続の方向や新しい教育課題も様々に見える機会となりました。15期中教審の中間報告がこの春に出るといふ今、教育にとって何が大事なのかを、約1000名という数字が暗に物語っているように感じられました。



大好評の企画展「ふるさと教育」

教育相談から

21世紀を担う子供たちのために

特殊教育・相談研修部長 後藤 貞介

特殊教育・相談研修部では、月1回の研究日に一部時間を割いて教育相談の受理確認等に当てています。

当センターの教育相談受理態勢は電話による相談の「すこやか電話相談」と直接センターを訪問して相談する「来所相談」に分けられます。

今年度、4月から1月までに受理した件数は次のようになっています。

- ・すこやか電話相談 —— 137
- ・来所相談 —— 148

センターが移転した際に、交通の便が悪くなるので、相談件数の減少を心配したのですが、どちらも、受理件数は昨年同期とほとんど変わりがありませんでした。教育相談には交通の利便さなどは関係ないことを痛感したところです。

すこやか電話相談についてその内容を見ますと登校拒否関係が群を抜いて多く、次に生活・習慣に関するもの、学業不振・進路に関するもの、言語障害に関するものの順になっています。ここ数年は、こうした傾向で推移してきています。

来所相談は、心身の障害を主とした相談の「障害児教育相談」と、生徒指導を主とした相談の「一般教育相談」に分けて受理しています。その内訳は次のようになっています。

- ・障害児教育相談 —— 66
- ・一般教育相談 —— 82

どちらも、ここ数年新しく受理した件数には大きな増減がありません。

来所相談では、一回の相談で満足して帰る方もいますが、1人で数回来所するケースが圧倒的に多くあります。面接のため訪問した回数は次のようになっています。

- ・障害児教育相談 —— 359
- ・一般教育相談 —— 1347

来所相談の相談内容は、すこやか電話相談と同様に多岐にわたりますので、次に障害児教育相談と一般教育相談について最近の傾向を詳しく紹介します。

○障害児教育相談の最近の傾向

障害児の早期発見・早期治療がシステム化され、

幼児期の療育に一つのめどがついています。しかし、就学に当たっては障害の軽重によらず通常の学級を希望するケースが増えています。そこで、始めて心身障害児にかかわることになった学級担任から指導法に関する相談が多く寄せられています。

また、学習相談といった多くの教職員にはなじみの少ない児童の扱いについて、保護者との考え方の相違で来所するケースも多くなりました。

○一般教育相談の最近の傾向

一般教育相談82件の中で、登校拒否の相談が63件あり例年と同様に大きな割合（77%）を占めています。これを校種別にみると、小学生が27%、中学生が33%、高校生が40%となり、特に高校生の増加（昨年同期16%）が顕著です。

小学生と中学生では、仲間作りが苦手で人間関係がうまくいかないという相談が目立ちました。また、高校生では、進路変更のために中途退学を希望している深刻な相談が多く見られました。

相談して帰る子供たちの後ろ姿は、来所した時よりも足取りが軽やかに見えます。これが、私共の明日の糧になっています。

学校においても、積極的な教育相談を推進してもらい、すべての児童生徒がより良き人格の形成を目指せるように援助してほしいと思います。そんな中で、少しでも疑問などがありましたら、当センターへ気軽に声を掛けてください。

21世紀を担う子供たちの幸せのために共に考えたいと思っています。



平成8年度

魅力ある講座をめざして

総合教育センターとなって2年目を迎えます。施設、設備、機器、研修室等を有効に活用し、一層新鮮味があり、受講者にとって充実した魅力ある研修講座になるよう工夫しました。

次にその特色を紹介します。

①国や県の教育課題にこたえる講座を新設しました。

- ふるさとの学び（ふるさと教育）
- 民族音楽の指導と展開（教科）
- 楽しい授業をつくる教材・教具の製作（特殊教育）

②現地で実施する講座（臨地講座）が増えました。

- ふるさと秋田の遺跡探訪（鹿角市）
- 森の生態系を探る（仁別国民の森）
- 豊かな感性を育てる環境教育（五城目町）
- 意欲を育てる理科指導（大森山動物園）

③校種にとらわれないオープン参加のできる講座（教科・オープン講座）を増設しました。

- 短歌・俳句の創作教室
- 木のぬくもりを教室へ
- ニュースポーツに挑戦など15講座

④「教職と人生」をテーマにした公開講座を、シリーズとして研修講座の中に組み入れました。

- 秋田の先人に学ぶ
（筑波大学・教授 佐藤常雄氏）
- この道ひとすじ 一鳥海山に魅せられて―
（元仁賀保高校長 加藤雄悦氏）
- 福祉とボランティア
（アカシャ会・名誉会長 鷲尾 絢氏）
- 脳卒中の外科治療に携わって
（中通総合病院・脳神経外科部長 菅原 厚氏）
- 私の生涯学習 ―シャンソンとわたし―
（日本シャンソン協会・理事 黒崎昭二氏）

なお、この他に次のような公開講座があります。

- 教育課程編成と研修の在り方
（国立教育研究所・室長 高階玲治氏）
- 学校を変える情報教育の在り方
（東京工業大学・教授 赤堀侃司氏）
- 豊かな心と確かな学力
（文教大学・教授 石田恒好氏）

⑤5年経過研修講座には、新たに「いじめ問題」に関する研修内容が、また、10年経過研修講座には、「いじめ・登校拒否」に関することや、企業等体験研修など新しい研修内容が導入されています。

平成7年度 総合教育センター刊行物案内

個性を生かす学校経営

一教育目標の具現化を目指した学校評価の在り方
本研究では、学校経営における諸課題を分析し、学校評価の在り方について考察した。その結果、各学校における学校評価の実施に便宜を図るため、13項目の「学校評価のQ&A」を提示し、学校評価基準として『三相ビジュアル学校評価』を開発した。

学び続ける意欲を確かなものにする学習指導

生涯にわたって学び続けようとする児童生徒を育てるため、教科指導では、自ら学び・学び合うことができるような授業の在り方が問われている。

本研究は、各校種の全教科における授業改善の視点を明確にして「年間及び単元の指導計画」「単位時間レベルの授業」の改善策を探ったものである。

パソコン通信をととした情報教育

平成7年6月から運用を開始したパソコン通信「教育ネットAkita」の活用の在り方を探った。

パソコン通信を利用した児童生徒の交流（フォーラム：「わくわく広場」）をとおして、遠隔地の学校同士の多様な交流が図られ、教育活動におけるパソコン通信の有効性を確認することができた。

精神薄弱養護学校における ひびき合う授業の工夫

授業は、学習集団の児童生徒全員による自主的・能動的な学習活動であろう。この視点から障害児教育における個人の形成と集団の形成の融合した授業を試み、学習活動の質の高まりを工夫した実践収録である。